があってはじめて充用できるような巨大企業の技術的設備をもつくりだす。したがって，現代では，個別資本のあいだの引力と集中への傾向とが，以前のどんな時代よりも強くなっている。だが，集中運動の相対的な範囲とエネルギーとは，資本主義的富の既成の大きさと経済機構の優越とによってある程度決定されるが，集中の進展は，社会的資本の絶対的増大に依存しない。このことからなによりも，集中を，累進的規模での再生産の必然的帰結にすぎない集積から区別する。集中は，現存する資本の配分の変更，社会的資本の構成部分の量的配列の変更しか必要としない。／一方で資本がただ一つの手のなかに大量に増大することができるのは，他方で，それが多数の手から逃げ去るからである。ある特殊な生産部門では，充用されたすべての資本がもはやただ一つの個別資本をなすだけになるとすれば，そのときはじめて，集中がその極限に達した，ということになるであろう。ある与えられた社会では，一国の総資本はもはや，ただ一人の資本家または資本家たちのただ一つの会社の手のなかにあるただ一つの資本でしかない，ということになれば，そのときはじめて，集中がその極限に達した，ということになるであろう。集中は，産業資本家がその経営規模を拡大することができるようにすることによって，蓄積という行為を補うだけである。経営規模の拡大という結果が蓄積にもとづくにせよ，集中にもとづくにせよ，集中が併合という力ずくのやり方――少数の資本は，他の資本にたいして非常に強力な重心になるから，他の資本の個別的凝集力を破壊し，これらの資本の分解された要素を引き寄せて大きくなる――で行なわれるにせよ，または，既成のまたは形成中の多数の資本の合併が，株式会社等々のもっと穏やかなやり方で行なわれるにせよ，経済上の効果はやはり同じままである。拡大した企業規模はつねに，集団的労働のいっそう大規模な組織化，この規模の物的機動力のいっそう大きな発展，一言で言えば，細分された旧式の生産過程の，社会的に結合され科学的に整序された生産過程への累進的な進化，の出発点であろう。しかし，明白なことだが，蓄積，螺旋状の再生産による資本の漸次的増大は，まずなによりも社会的資本の構成部分の量的配列を変えるにすぎない集中に比べれば，緩慢なやり方でしかない。たとえば，もし世界が，個別資本が蓄積によって鉄道の仕事ができるほど十分に増大するときまで待たなければならなかったとすれば，世界はまだ，鉄道網なしに済ませていたことであろう。資本の集中は，株式会社によって，いわばまたたくまに鉄道網を世界に供給した。集中は，蓄積の効果をこのように増大し促進することによって，資本の技術的構成の変化，資本の可変部分を犠牲にして不変部分を増大させる変化，すなわち労働にたいする相対的需要の減少を引き起こす変化を，拡大し促進する。／集中によって即座につくられた大資本は，ほかの資本と同様に，しかしほかの資本よりも急速に再生産され，こうしてこんどは，社会的蓄積の強力な動因になる。この意味では，社会的蓄積の進展と言う場合，集中によって産みだされる効果を言外に含むことも許される。」（『資本論』第1部フランス語版。MEGA II/7, S. 547-549.）

6）この点については，拙著『図解　社会経済学』148-149ページを参照されたい。労働日

をめぐる賃労働者の闘いは，なによりもまず，商品の売り手としての権利の主張なのである。

7）「労働の社会化」が「労働が社会的になっていくこと」を意味することについては，第3章（220-221ページ）を見られたい。

8）マルクスは，この当時「集積〔Conzentration〕」と言っていたものを，のちに「資本の集中〔Centralization〕」と呼ぶようになる。

9）この「諸資本〔d. Capitalien〕」は「資本家〔d. Capitalisten〕」の誤記であろう。

10）草稿では，この「社会的生産」という語の上に「アソーシエイトした生産」と書かれている。

11）マルクスは同じ趣旨のことを，『資本論』第3部第1稿で次のように書いている。「資本主義的生産の主要事実。／少数者の手中への生産手段の集積。これによって，生産手段は直接的労働者の所有として現われることをやめ，最初は資本家たちの私的所有としてではあるが，生産の社会的な諸力能に転化する。資本家はブルジョア社会におけるそれら諸力の受託者〔trustee〕であるが，この受託〔trusteeship〕のすべての果実を取り込んでしまう。／労働そのものの社会的労働として組織化，協業，分業，および労働と自然科学との結合によって。／資本主義的生産様式はこの両面によって，対立的な諸形態においてではあるが，私的所有と私的労働とを廃棄する。／世界市場の形成。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA II/4.2, S. 339; MEW 25, S. 276-277.）

4　陣痛を引き起こすものはなにか

しかし，社会的労働および社会的生産の諸形態は，資本主義的生産様式の胎内で成長していっても，胎児と同じく自分自身の力で母胎から生まれでることができるわけではない。母体が十分に成長した胎児を産みおとすには，この母体そのものに，出産が近づいたことを知らせるもの，つまり母体の陣痛すなわち「産みの苦しみ〔Geburtswehen〕」がやってこなければならない。

この陣痛を引き起こすもの，それが，母体である資本主義的生産様式に内在する矛盾の深化である。

マルクスは，『経済学批判』序文のいわゆる「唯物史観の公式」のなかで，次のように書いた。

「社会の物質的生産諸力は，それの発展のある段階で，その内部で社会の物質的生産諸力がそれまで運動してきたところの既存の生産諸関係と，あるいはそれの法的表現にすぎないが，所有諸関係と矛盾するようになる。

これらの諸関係は，生産諸力の発展諸形態からそれの桎梏に転回する。そのとき，社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに，巨大な上部構造全体が，あるいは徐々に，あるいは急激に変革される。」（『経済学批判』序言。MEGA II 2, S. 100-101; MEW 13, S. 9.）

同じことをマルクスは『資本論』第3部第1稿で次のように言っている。

「他方，この過程〔労働過程〕の特定の歴史的形態は，それぞれ，さらにこの過程の社会的な物質的諸基礎および諸形態とを発展させるのだ！ ある成熟段階に達すれば，一定の歴史的形態は脱ぎ捨てられて，より高い形態に席を譲るのだ！ このような危機の瞬間が到来したということがわかるのは，分配諸関係，だからまたそれらが対応する，生産諸関係の特定の歴史的な姿と，生産諸力，それの諸能力，および，それの諸能因の発展とのあいだの矛盾と対立とが，広さと深さとを増したときなのだ！ そうなれば，生産の物質的発展と生産の社会的形態とのあいだの衝突が起こるのである。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA II 4.2, S. 900; MEW 25, S. 891.）

社会の生産諸関係は，もともとはそれの内部での生産諸力の発展を促進していくのだが，その発展があるところまで進むと，発展した生産諸力にとって生産関係が制限となり，両者のあいだに矛盾が生まれる。そこで，この矛盾が革命思想を生みだし，この革命思想にもとづく革命運動がついに社会革命を引き起こす。新たに生まれた政治権力，したがって新たな法的・政治的上部構造のもとで，土台である経済構造が，発展した生産諸力に対応するものに変革される。これがここで言われていることである[1]。マルクスのこの把握は，なによりも，目の前にある現代の資本主義社会の生成と消滅とを念頭において，これを説明するものであり，資本主義社会から次の社会すなわちアソシエーションへの移行を説明すべきものであった。

この資本主義的生産様式の矛盾とはどういうものであろうか。マルクスによる，最も一般的な表現は，次のとおりである。

「資本主義的生産様式の矛盾は，この生産様式が生産諸力を絶対的に発展させようとする傾向をもちながら，この発展が，資本が運動する場である独自な生産諸関係とたえず衝突する，というところにある。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA II 4.2, S. 331; MEW 25, S. 268.）

いわゆる「公式」で言う生産諸力と生産諸関係との矛盾は，資本主義的生産様式では「生産諸力を絶対的に発展させようとする傾向」と「資本が運動する場である独自な生産諸関係」との矛盾として現われている。この両項のうちの前者こそが，この矛盾を深化させる動因である。この動因は，じつは，資本主義的生産様式を，人類が歴史的な通過点として経験しなければならない必然的な通過点として正当化する（berechtigen）「歴史的な弁明理由〔Berechtigung〕」なのであり，歴史のなかで資本主義的生産様式が果たすべき「任務〔Aufgabe〕」，「使命〔Beruf〕」であり，つまり，資本主義的生産様式にとってのゾレン（sollen）である。マルクスは言う。

「資本の偉大な歴史的側面は，この剰余労働を……つくりだすことである。……労働する社会が，その前進する再生産の過程にたいして，またいよいよもって充実していく再生産の過程にたいして，科学的に関わるようなところまで進めば，つまり物のたぐいだけに任せておいてもいいようなことまで，労働というかたちで人間が行なっている場合，そういう労働がなくなってしまうようなところまで進めば，資本の歴史的使命は充たされるのである。したがってここでは，資本と労働とは，貨幣と商品とがするのと同じように，互いに関わり合う。一方〔資本〕が，富の一般的形態であるのにたいして，他方〔労働〕は，直接的消費を目的とする実体でしかない。しかし資本は，富の一般的形態を飽くことなく追い求める努力として，その自然必然性の限界以上に労働を駆り立て，このようにして豊かな個性を伸ばすための物質的諸要素をつくりだすのである。豊かな個性は，その消費においても生産においてもひとしく全面的であり，したがってまたそれが行なう労働が，もはや労働としては現われることはなく，活動〔Thätigkeit〕それ自体の十全な展開として現われるのであって――しかもこの活動においては，自然的欲求に代わって一つの歴史的に生みだされた欲求が登場しているから，直接的形態をとった自然的必然性は消滅しているのである。だからこそ資本は生産的なのである。すなわち社会的生産諸力の発展のための本質的な関係なのである。資本は，この生産諸力の発展そのものが資本それ自体のなかに一つの制限を見いだすときはじめて，そうしたものであることをやめる。」（『経済学批判要綱』。MEGA II 1.1, S. 241.）

マルクスは，資本主義的生産様式の「生産諸力を絶対的に発展させようとする傾向」を次のように「資本の偉大な文明化作用」あるいは「文明化傾向」と呼ぶ。

「つまり資本にもとづく生産は，一方では普遍的な産業活動〔Industrie〕——すなわち剰余労働，価値を創造する労働——をつくりだすとともに，他方では，自然および人間の諸属性の全般的な開発利用〔Exploitation〕の一体系，全般的な有用性の一体系をつくりだすのである。そして科学そのものが，すべての肉体的属性および精神的属性と同様に，この体系の担い手として現われる。他方，それ自体として天上的なもの〔An-sich-Höheres〕として，それ自体として正当化されるもの〔Für-sich-selbst-Berechtigte〕として，社会的生産および交換のこの圏域の外に現われるようなものは，いっさいなくなる。このようにして，資本がはじめて，市民社会〔ブルジョア的社会〕を，そして社会の成員による自然および社会的関連それ自体の普遍的取得を，つくりだすのである。ここから資本の偉大な文明化作用〔the great civilising influence of capital〕が生じ，資本による一つの社会段階の生産が生じるのであって，この社会段階に比べれば，それ以前のすべての段階は，人類の局地的諸発展として，自然崇拝〔Naturidolatrie〕として現われるにすぎない。自然ははじめて，純粋に，人間にとっての対象となり，純粋に，有用性をもつ物象となり，独自の威力〔Macht für sich〕と認められることをやめる。またそれどころか，自然の自立的な諸法則の理論的認識が，自然を，消費の対象としてであれ生産の手段としてであれ，人間の諸欲求に服従させる，そのための狡智〔List〕としてしか現われない，ということにさえもなる。資本は，このような自己の傾向に従って，自然の神化を乗り越えて突き進むのと同様に，もろもろの民族的な制限および偏見を乗り越え，既存の諸欲求の，一定の限界内に自足的に閉じ込められていた，伝来の充足と，古い生活様式の再生産とを乗り越えて突き進む。資本は，これらいっさいにたいして破壊的であり，たえず革命をもたらすものであり，生産諸力の発展，諸欲求の拡大，生産の多様性，自然諸力と精神諸力の開発利用ならびに交換を妨げるような，いっさいの制限を取り払っていくものである。／だが，資本がそのような限界のすべてを制限として措定し，したがってまた観念的にはそれらを超えているからといって，資本がそれらを現実的に克服したということにはけっしてならない。そして，そのような制限はいずれも資本の規定に矛盾するので，資本の生産は，たえず克服されながら，また同様にたえず措定される諸矛盾のなかで運動する。そればかりではない。資本がやむことなく指向する普遍性は，もろもろの制限を資本自身の本性に見いだすのである。これらの制限は，資本の発展のある一定の段階で，資本そのものがこの傾向の最大の制限であることを見抜かせるであろうし，したがってまた資本そのものによる資本の廃棄へと突き進ませるであろう。」（『経済学批判要綱』。MEGA II 1.2, S. 322–323.）

ここで，「もろもろの民族的な制限および偏見を乗り越え，既存の諸欲求の，一定の限界内に自足的に閉じ込められていた，伝来の充足と，古い生活様式の再生産とを乗り越えて突き進む」と言われているように，この「文明化傾向」こそ，資本に，世界市場を拡大し続けて，世界中の諸個人を結合して，一つの人類にしていくことを強制するものである。

だから，資本の本質的な内在的矛盾とは，資本が自己の歴史的任務を果たそうとするこうした傾向が，資本主義的生産関係という社会的生産の独自の形態と衝突する，ということなのである。

マルクスは，生産諸力をどこまでも発展させようとする資本の傾向が，資本主義的生産の制限とどのように衝突するのか，を次のように描いている。

「資本主義的生産の真の制限は，資本そのものであり，資本とそれの自己増殖とが出発点および終点として，生産の目的として現われる，ということであり，生産はただ資本のための生産だということ，そしてそれとは反対に，生産手段が，生産者たちが形成している社会のために生活過程を拡大し形成するためのたんなる手段なのではない，ということである。だから，これらの制限——生産者大衆の窮乏化と収奪という土台にもとづく資本価値の維持および増殖はこれらの制限のなかでしか運動できない——は，資本が自分の目的のために充用せざるをえない生産諸方法，そして生産の無制限な増加に向かって，自己目的としての生産に向かって，労働の社会的生産諸力の無条件的発展に向かって突進していく生産諸方法とは，たえず矛盾することになる。社会的労働の生産諸力の無条件的発展という手段は，既存資本の増殖という制限された目的とたえず衝突することになる。

それだから，資本主義的生産様式は，物質的生産力を発展させこれに対応する世界市場をつくりだすための歴史的な手段であるが，それはまた同時に，資本主義的生産様式のこの歴史的任務とこれに対応する社会的生産諸関係とのあいだの恒常的矛盾なのである。」（『資本論』第3部第1稿　MEGA II 4.2, S. 324; MEW 25, S. 260.）

この矛盾をさらに具体的につかむためには，『資本論』第1部での資本の生産過程の分析と第2部での資本の流通過程の分析とを踏まえたうえでなされた，第3部での，資本主義的生産の総過程のもとで進行する，資本と剰余価値との，人々の目に見えている諸姿態の展開を見なければならない。

『資本論』第3部第1稿では，第1部で明らかにされた剰余価値が，人々の目に見えているところで「利潤」という形態をとっているところから分析が始められている。ここでは，資本の生産過程の分析のなかで明らかにされていた，資本による「生産の直接的目的および規定的動機としての剰余価値の生産」（『資本論』第3部第1稿。MEGA II 4.2, S. 898; MEW 25, S. 887）は，個別諸資本による利潤の獲得という形態をとり，資本家によって意識され，資本の行動を決定するものとなっている。そこで，「社会的労働の生産諸力の無条件的発展という手段」と「既存資本の増殖という制限された目的」との衝突は，いまや，生産諸力の発展と「資本家たちの利潤による制限」（『1861-1863年草稿』。MEGA II 3.3, S. 1149）との衝突という具体的な形態をとることになる。「利潤による制限」が経済学者の目にも，さらに資本家たちの目にも，顕わに見えるようになるのは，利潤率が低下していくという現象である。マルクスは，第3部第1稿第3章「資本主義的生産の進展のなかで生じる一般的利潤率の傾向的低落の法則」のなかで，「これまでけっして理解されたことがなく，まして意識的に言い表わされたこともない」，しかし「最も困難な諸事情を理解するための最も本質的な法則」であり，「歴史的見地から見て最も重要な法則」（『経済学批判要綱』MEGA II 1.2, S. 622）であるこの法則を解明した。彼が明らかにした法則そのものとは，第1に，資本蓄積の進行に必然的にともなう生産諸力の発展が資本の有機的構成の高度化をもたらし，その結果として，利潤率の低下という現象が生じているのだ，ということ，第2に，この率の低下は，資本量の増大によって利潤量を増大させようとする資本家の衝動を生み，さらに資本蓄積を促進させる，ということ，このような両面的な作用を含むものであった。そのうえで彼は，個別諸資本にとって競争の外的強制法則として貫く資本の内的諸法則が，剰余価値率の上昇と不変資本の諸要素の低廉化とをもたらすので，たえず貫いている利潤率低下の法則そのものの作用は傾向的なものとして現われることを明らかにした。そして，さらに一歩を進めて，両面的な作用を含むこの法則に内在する諸矛盾が，諸資本の競争のなかでどのようなかたちで現われてくるのか，ということを分析した。ここに現われてくるもろもろの衝突こそが，資本主義的生産様式の「被制限性〔Beschränktheit〕」と歴史的に過渡的なものであるという性格とを，人々の目にさらすことになるのである。

「しかし，利潤率の低下にたいする彼ら〔リカードウのように資本主義的生産様式を絶対的な生産様式と考える経済学者たち〕の恐怖のなかで重要なのは，彼が次のことを感じているということである。すなわち，資本主義的生産様式は生産力の発展に関して富の生産とはまったくなんの関わりもない制限を見いだすのであり，この特有な制限は，この生産様式の被制限性とただ歴史的な性格とを証明しているのであり，そして，資本主義的生産様式が富の生産にとって絶対的な生産様式ではなくて，むしろ或る段階で富のそれ以上の発展と衝突するようになる，ということである。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA II 4.2, S. 310; MEW 25, S. 252.）

この矛盾および衝突は，資本主義的生産様式に内在的な本質的矛盾である。

「矛盾は，ごく一般的に表現すれば，次の点にある。すなわち，資本主義的生産様式は，交換価値とそれに含まれている剰余価値（利潤）を度外視すれば，資本主義的生産がそのなかで行なわれる社会的諸関係を度外視すれば，生産諸力の絶対的な発展への志向を伴っているが，同時に他面では現存する資本の既存の価値の維持とそれの最大限の増殖（すなわちそれの交換価値の加速的増大）をめざして努力しているということである。この生産様式の独自の性格は，既存資本の交換価値をこの価値の最大可能な増大に向けられている。それがこの目的を達成するための方法は，利潤率の減少，既存資本の減価，すでに生産されている生産諸力を犠牲としての労働の生産諸力の発展を含んでいる。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA II 4.2, S. 323; MEW 25, S. 259.）

この矛盾は，資本主義的生産様式が存続するかぎり，繰り返して「社会的労働の生産諸力の無条件的発展という手段」と「既存資本の増殖という制限された目的」との衝突として現われ，そのたびにその一時的な解決を見いだしていかなければならない。この衝突と一時的な解決こそが，恐慌による産業循環の終結とその後の新たな産業循環の開始である。

「資本主義的生産様式の制限は次の点に現われる。／(1)労働の生産力の発展は利潤率の低下のうちに一つの法則を生みだす。この法則は，生産力の発展がある点にまで達すればこの発展自身に敵対的に対抗し，だからまたたえず繰り返して恐慌によって[2]克服されなければならない。／(2)社会的諸欲求にたいする，社会的に発達した人間の諸欲求にたいする，生産の割合ではなくて，不払労働の取得と対象化された労働一般にたいするこの不払労働の割合とが，資本主義的生産様式の制限として現われる。それだから，資本主義的生産様式にとっては，生産が他の前提のもとでは逆に不十分だと思われるような限度に達すると制限が現われるのである。この生産様式は，諸欲求の充足が休止を命じる点でではなく，利潤の実現と生産とが休止を命じる点で休止するのである。」(『資本論』第3部第1稿　MEGA II 4.2, S. 332; MEW 25, S.268-269.)

資本は，自己の歴史的任務を果たそうとして生産諸力を発展させていくが，そのある点で自己自身の制限にぶつかり，もろもろの矛盾が総合的に爆発して，一時的に「休止する」。資本は，胎内に孕む新社会を出産しないかぎり，この爆発によってその矛盾を一時的に解決しては，そこからまた新たに同じ過程を歩まなければならない。だから，恐慌とは，資本主義的生産様式の痙攣であり，資本主義社会に，胎児である新たな社会を産みおとすことを促す陣痛である。そしてこの陣痛を引き起こすものものは，資本主義的生産様式そのものに内在する矛盾とそれの深化なのである。

1) だから，法的・政治的上部構造と社会的意識諸形態とを――エンゲルスがやっているように――ひとくくりにして「上部構造」と呼び，この「上部構造」が経済的構造の総体である土台の上にそびえ立っている，という，存立している社会のいわば組み立てを明らかにしたところに「唯物史観の公式」の核心を見るのはまったくの見当違いである。マルクスがここで明らかにしたのは，社会的意識形態である革命思想による人間諸個人の実践的行動こそが法的・政治的上部構造を転覆させ，新たな経済的構造を育むことになるのだが，この革命思想そのものが，生産諸力の発展によって必然的に生じるそれらと生産諸関係との矛盾から，つまりは土台の痙攣から生まれるのだ，ということである。この核心を見失わさせることに圧倒的な力を発揮してきたのは，マルクス＝レーニン主義というスターリン製のイデオロギーである。この点については，拙著『図解 社会経済学』36-39ページ，を参照されたい。

2) ここで，「繰り返して恐慌によって」としたところは，原文では「諸恐慌〔Crisen〕によって」となっている。マルクスは，資本主義的生産様式のもとで生じる「恐慌」に言及するときにはほとんど Crisen と複数で書いている。これは，恐慌が繰り返して何度も生じる，ということを含意しているものなのである。ここでは，そのことを言い表わすのに「繰り返して」という語を使っておいた。

5　新生児をどのようにして産みおとすのか

出産のさいに産科医ないし助産師の助けが役だつが，その助けがなくても出産は可能であり，実際にそうした出産もある。しかしその場合でも，産気づいたときに必要なのは，産婦の頑張りである。このときには胎児も産婦も苦しい。しかし胎児は自分でこの苦しみを取り除くことはできない。それにたいして，産婦は襲ってくる産気に促されて，自ら頑張ってこの苦しみに耐え，我が子を産みおとそうとし，そして最後には実際に産みおとす。このいきみ，頑張りがあってはじめて胎児が新生児となって生まれてくるのである。この意味で，出産の主体はまさに母体であり，助産師の行為はただ出産を助けるだけである。それだけではない。そもそも産婦は，妊娠がわかったときから，胎児が順調に成長するように終始，気を配り，健康な我が子が生まれてくるように努力を重ねるのである。こうした振る舞いができるのは，母体だけである。

旧社会が新社会を産みおとすときも同じである。旧社会の胎内で胎児が十分に成長し，もはや狭い胎内にとどまることができなくなったとき，旧社会は産気づく。しかし，臨月がきて産気づいても，最終的に出産する主体は母体であり，母体の頑張りが必要である。

マルクスは，新社会の誕生を，旧社会が胎児を出産することにたとえた。しかし，だれでも知っているように，旧社会から新社会への移行すなわち社会革命は，自己意識をもった人間諸個人の目的意識的行動によってなしとげられる